

性別構成が性的自己ステレオタイプ化に及ぼす影響¹⁾

—— 自己カテゴリー化, ステレオタイプ回避, 社会的アイデンティティ仮説の検証 ——

潮村 公弘

[問題]

自分がおかれた状況における性別構成（人数上の性別構成）が、自己に対するステレオタイプの認知や他者に対するステレオタイプの認知に影響を及ぼすことについては、様々な知見が報告されているけれども、その影響内容については一貫していない（cf. Swan & Wyer, 1997）。しかしながら、そもそも性別構成の影響を論じる以前に、ステレオタイプが生じる原理自体について十分な研究がなされてきたとは言えない。

ステレオタイプがいだかれるのは、知覚者が他者や外界を社会的な属性をもとにしてカテゴリー化処理を行っているためである、とする言説は広く受け入れられている（Allport, 1954; Taylor, Fiske, Etcoff, & Ruderman, 1978, など）。そうであるならば、入力情報をカテゴリー化処理する程度が強いほど、ステレオタイプの的な評定が強くなるのが当然予想される。しかし、この両者の関連性は独立（無相関）であることが実証的に報告されてきた（例えば、Taylor & Falcon, 1982; 潮村, 1995）。しかるに振り返ってみるに、カテゴリー化処理がステレオタイプ化を引き起こすとあまねく主張されてきたにもかかわらず、この2つの処理過程間の関連性については、精緻に論じられてはこなかった。2つの処理過程間の関連性については、社会的認知研究の視点から社会的カテゴリー化効果について実証的に検討されはじめた当時の認知心理学的なカテゴリー化概念（例えば、Hensley & Duval, 1976）を、社会的な事象に単純に適用してきたに過ぎないと言えよう。

潮村（1991; 1995など）は、情報処理特性論の視点から対人記憶課題でのカテゴリー化効果と、印象評定課題でのステレオタイプの評定の関連性を同定しようとする研究を行なった。そこでは、刺激呈示状況の質的相違とステレオタイプの評定との関連性について解明をしたけれども（詳細は潮村（1995）を参照のこと）、カテゴリー化処理とステレオタイプの評定という2つの測度間の関連性については、刺激呈示状況の操作に対して両測度が独立に機能することを示し得たことにとどまり、未解決の問題を残している。すなわちこれら2つの測度間の直接的な関連性については同定し得ていない。具体的には潮村（1995）では、対人情報処理場面において記銘（入力）段階で性別基準を利用する程度と、印象判断（出力）段階での性ステレオタイプの評定との間に直接的な関連性が見出されていない、つまり両測度間に有意な相関が見出されていない。

一見、不可思議なこの結果に対して我々は、性ステレオタイプの評定においては、動機づけ論を積極的に組み入れて構築していると考えられる Swan & Wyer（1997）による複数の

註1) 本実験の実施にさいしては、今 博子さん（平成10年度信州大学人文学部卒業生：現、長野県警察本部）の協力を得た。記して感謝する。

影響パターン（具体的には以下に詳述）が混合しているためではないかと考え、Swan & Wyer (1997) による仮説枠組みをベースとしつつ、両測度の関連性を同定しうる実験パラダイムを用いて実験を実施した。ただしそのさい、本研究では性的顕現性に影響を与える要因として、被験者グループの性別構成を取り上げ、この性別構成が性的自己ステレオタイプ化に及ぼす影響に限定した範囲内で論じる。なお Swan & Wyer (1997) による仮説枠組みについては、これから順次、説明を加えていくことにする。

記銘（入力）段階でのカテゴリー化効果は、accentuation 効果（強調効果もしくは強調化効果と訳されることがあるが、定訳はないので本論文では accentuation 効果と表現する）と呼ばれている。この accentuation 効果は、様々な属性に関して頑健に示されてきた効果である（cf. Hewstone, Hantzi, & Johnston, 1991）。そして現在の集団間関係研究においても、いかにしてこの accentuation 効果を低減させうるかということは主要な探求テーマのひとつである。そして、性別や人種という属性次元は、様々なカテゴリー化次元の中でもその効果が最も堅固に示されてきた次元であると言える（例えば、Park & Rothbart, 1982; Taylor & Falcon, 1982; Frable & Bem, 1985; Hewstone ら, 1991）。したがって性別という属性次元に関して、記銘（入力）段階での accentuation 効果において個人差要因や状況要因による変動性を考慮することは一般に困難である。

したがって、accentuation 効果とステレオタイプの評定の間に相関関係が示されないのは、ステレオタイプの評定こそが、その表出段階において文脈的要因による影響を受けているためであると想定することが妥当であると考えられる。この時、任意の社会的カテゴリーに結びついた社会的ステレオタイプの活性化を抑制して回避し、反ステレオタイプの表出を行うというプロセスを考えることができる。このようなステレオタイプの抑制・回避過程は非社会的なステレオタイプ（例えば典型的な例を挙げれば、線分に対するその長さや、椅子に対する椅子らしさといったようなもの）には一般に存在しないと考えられることから、社会的ステレオタイプと非社会的なステレオタイプを区分する最も特徴的な側面のひとつであると考えることができよう。なお本研究では、この社会的ステレオタイプの回避・抑制過程が意識的な過程であるか否かについては問わない。

Swan & Wyer (1997) は男女それぞれに、性別に基づくどのようなステレオタイプ化が生起するかについて3つの対立仮説を提起している。ここでは、自己に対するステレオタイプ化に対象を限定して論じよう。

【自己カテゴリー化仮説】 内集団の一部として自己を同化（脱個人化）するために、ターゲットが属する社会的カテゴリーに基づいて、カテゴリー属性に沿ったステレオタイプの評定がなされる。すなわち、男性被験者は自己を男性的にステレオタイプ化して評定し、女性被験者は自己を女性的にステレオタイプ化して評定すると予測する仮説。

【ステレオタイプ回避仮説】 自己が属する社会的カテゴリーが活性化されることによってステレオタイプが喚起されるけれども、（そのステレオタイプに従うことをよしとせず）ステレオタイプを回避した、反ステレオタイプの評定を行う。したがって男性被験者は自己を女性的にステレオタイプ化して評定し、女性被験者は自己を男性的にステレオタイプ化して評定するとする仮説。

【社会的アイデンティティ仮説】 社会的カテゴリー（社会集団）間の地位の相違およびそ

の地位差が自己概念に対してもつ含意に焦点を向け、社会的に上方移動しようと知覚した場合には、自分自身に対して上方集団（性別に関する上方集団は男性集団であると考えられる）とステレオタイプのに一貫した評定を行なう。すなわち、男性被験者は自己を男性的にステレオタイプ化して評定し、女性被験者も自己を男性的にステレオタイプ化して評定すると予測する。

この仮説群は、次の2つの点において評価に値すると考えられる。1) 自己カテゴリー化理論や社会的アイデンティティ理論といった現代社会心理学における主要な理論枠組みとの整合性が高い。2) 3つの仮説が、全体として組織的に構成されているとともに、仮説の検証に関して対立仮説的な構成がなされている。特に1)の点は重要であり、潮村によるこの問題に対する一連の先行研究（潮村、1995など）は、認知論的な視点のみからアプローチしたものであり、その意味では制限されたパースペクティブの中でのみ扱われてきた側面を有する。それに対して、本研究では広義の社会的アイデンティティ論という動機づけ論的な視点も含めてアプローチされる。この時、ステレオタイプの社会的回避・抑制というプロセスを積極的に取り込んでいくためには、社会的抑制が喚起されるような状況要因の設定（ここでは、独立変数の設定を意味する）、ならびに内/外集団に対する同一化・同一視過程を考慮することが有用であると言えよう。また、後者の同一化・同一視過程を考慮していくためにも動機づけ論を含めて考えていくことが重要であると考えられる。

Swan & Wyer (1997) は、これらのステレオタイプの評定パターンについて検討するにさいして、ステレオタイプ化の生起様態を明瞭に操作するための概念として、性的顕現性 (gender salience) を用いた。すなわち、当該状況において、知覚者にとって性別次元が顕現的になる場合（すなわち性別次元のアクセシビリティが高まる場合）には、そうではない場合に比して、3つの仮説パターンのいずれかの性的ステレオタイプ化評定が明瞭に生じると想定した。

彼女らの研究の理論的な根拠は、McGuire (1984) の distinctiveness theory にある。McGuire (1984) によれば、所与のグループが永続的なグループであれ一時的なグループであれ、内集団が数的構成の点でマイノリティの状況にある場合には、マジョリティの状況にある場合に比べて、内集団と外集団を弁別しうる特徴的な弁別次元が本人にとって顕現的 (salient) なものになると主張し、自らが実施した多くの研究においてそのことを実証してきた。

したがって、被験者が実験場面において性別に基づく数的な構成の点でマイノリティ状況におかれることによって、マジョリティ状況におかれた場合と比較して性的顕現性の増加が導かれると予想される。この性的顕現性が増加するということは、性別という弁別基準が顕現的になることをあらわしていることから、必然として、性別に基づく accentuation 効果の程度がより強力になると考えられる。そのような操作を加えられた上で、いずれの仮説を支持するようなステレオタイプ化評定パターンが示されるかについて検討することになる。

Swan & Wyer (1997) の実験結果は「社会的アイデンティティ仮説」を支持した。しかし、これら3つの仮説はそれぞれにその論拠と、少なくともその仮説を間接的には支持する先行研究結果を有している。それゆえに、3つの仮説・ステレオタイプ化方略は、状況要因（本研究では公的表明性の程度を取り上げた）と個人差要因（本研究では性役割態度を取り

上げた)とに依存して規定されるものとして位置づけ、これらの要因による文脈的依存性(以後、本研究では、状況要因と個人差要因とを合わせて文脈的依存性と呼ぶ)について検討する。

そして、この文脈的依存性の様態を解明することが、記銘段階で性別基準を利用する程度すなわち accentuation 効果の程度と、印象判断段階での性ステレオタイプの評定との直接的な関連性が見られないという未解決の問題探求に寄与すると考えられる。

[方法]

被験者

信州大学の学生76名(男性38名,女性38名)

手続き

1) ジェンダー問題に対するスムーズな導入を図るために、Dreyer ら(1981)による性別志向性尺度(訳出は東・小倉(1984)に従った)16項目のうちからランダムに選択した8項目への回答を求めた。なお8項目の選択は無作為におこなわれ、全被験者に対して同一の8項目への回答が求められた。

2) 教示:実験課題について説明するさいに、公的表明性要因の各条件内容に応じた説明を与えた。ビデオ録画条件では「指導教官による今後の授業の中で、社会心理学の実験を紹介するために実験のすべてをビデオに録画したい。また回答結果すべてについてもあわせて授業で公開したい」とする旨の教示を与えた。一方、意見文作成条件では「実験者自身の参考資料とするために、ディスカッションについての意見を実験の最後に100字程度で書き出してもらい、しばらくの間、記録として残しておきたい。ただし第三者に公開することはない」とする旨の教示を与えた。

3) ディスカッション視聴:テーマは「夫婦間での家事分担」。テープレコーダーから聞こえてくる話し手の声と同期させて、発言を行なっている各話し手の顔写真が壁にスライドで提示される。

4) ディスカッションの提示終了後、各発言を行なった人物がどの話し手であったかについて回答し、続いて、話し手各個人に関する印象を28項目の特性尺度上で評定した。ただしこれらの測度は今回の報告の範囲外である。

5) 自己ステレオタイプ化測定のために、「自分自身」に対する特性評定を、各話し手に関する評定項目と同じ28項目(7件法:(1)全くあてはまらない~(7)非常にあてはまる)の特性尺度上で回答するように求められた(分析では(-3)~(+3)として得点化した)を用いて自己評定することを求めた。これらの項目は、性ステレオタイプや対人認知に関する先行研究および潮村(1995)から選択された。

6) 性別役割態度の測定:SESRA-S(鈴木,1994)15項目,Dreyer ら(1981)の残り8項目などに回答した。

7) 操作チェック項目ならびに実験課題に対する被験者の意識を尋ねる項目に回答した。

8) 最後に、ディブリーフィングを行って実験を終了した。

性別構成要因の設定

被験者の性別構成が異なる2種類の実験状況を設定し、その結果として被験者はどちらかの実験条件にランダムに割り振られた。1つは、女性は1人だけで他の被験者は男性である実験状況（女性マイノリティ実験状況と呼ぶ：この場合、実験者は男性とした）であり、もう一つは、男性が1人だけで他の被験者は女性である実験条件（男性マイノリティ実験状況と呼ぶ：実験者は女性とした）である。

このとき、「性別」要因と「性別構成」要因を組み合わせることによって以下のような条件配置が設定される（Table 1 参照）。“女性マイノリティ実験状況”（女性は1人だけで他の被験者は男性である実験状況）における、女性被験者（表(Table)中の(a)に相当：自分の性別がマイノリティ側の性別である女性被験者）と、同状況での男性被験者（表中の(d)に相当：自分の性別がマジョリティ側の性別である男性被験者）が構成される。

また、“男性マイノリティ実験状況”（男性が1人だけで他の被験者は女性である実験状況）における、女性被験者（表中の(b)に相当：自分の性別がマジョリティ側の性別である女性被験者）と、同状況での男性被験者（表中の(c)に相当：自分の性別がマイノリティ側の性別である男性被験者）が構成される。

Table 1 : 「性別」と「性別構成」要因によって構成される条件配置

	性別構成要因	
	マイノリティ条件	マジョリティ条件
女性被験者	自分の性別が マイノリティである 女性被験者 (a)	自分の性別が マジョリティである 女性被験者 (b)
男性被験者	自分の性別が マイノリティである 男性被験者 (c)	自分の性別が マジョリティである 男性被験者 (d)

補足) 女性マイノリティ実験状況では(a)(d)のデータを収集（波線枠内に対応）
男性マイノリティ実験状況では(b)(c)のデータを収集（実線枠内に対応）

実験計画

4 要因（ $2 \times 2 \times 2 \times 2$ ）計画。各要因は全て被験者間要因である。

「被験者の性別要因」（男性，女性）。

「公的表明性要因」：自分の反応がどの程度公的な状況下でなされているかという要因（高-公的表明性条件：ビデオ録画条件，低-公的表明性条件：意見文作成条件）。

「性別構成要因」（マイノリティ条件：実験場面で、自分と同性の者が他にはいない状況。マジョリティ条件：1人の異性を除き、残りの者は自分と同性である状況。なお、各実験試行には4名の被験者が参加し、マジョリティ側3名の内、2名は実験協力者であった。

「性役割態度要因」SESRA-S（鈴木，1994）を用い、性役割態度得点を中央値分割することにより、平等主義的性役割態度低群と平等主義的性役割態度高群を設定した。

[結 果]

〔操作チェック〕 公的表明性要因の操作チェック項目「実験で、記録をとられるということが気になった」、性別構成要因の操作チェック項目「周りの人たちの性別が気になった」のそれぞれに対して当該要因に基づく t 検定による操作チェックを行なった。その結果、公的表明性要因に関しては、操作が有効であることが確認された ($p = .017$)。その一方、性別構成要因については、統計的に有意な水準での有効性は確認されなかった ($p = .126$)。そこで、マジョリティ条件にもかかわらず性別構成を強く意識した被験者 2 名（外れ値と考えられた）を分析から除外することとした。その結果、操作が有効になされたと考えられる指標値が得られた（公的表明性要因： $p = .027$ ，性別構成要因： $p = .028$ ）。

〔自己ステレオタイプ化指標〕 潮村（1995）で抽出されたリーダーシップ次元（伝統的男性性次元とみなされた）とフォロワーシップ次元（伝統的女性性次元とみなされた）の 2 つの指標を採用することとした。具体的には、評定項目中の「有能だ」「指導力のある」「自己主張のできる」「頭のよい」「信念を持った」「自分の生き方のある」「視野の広い」の 7 項目の評定平均値を伝統的男性性次元の指標として採用した。また「道徳的な」「従順な」「静かな」「繊細な」という 4 項目の評定平均値を伝統的女性性次元の指標とした。

4 要因分散分析を行うにさいして、分析の主要な枠組みとなる処理効果は、「被験者の性別」×「性別構成」の 2 要因交互作用効果であり、この交互作用形態が「公的表明性」要因と「性役割態度」要因とによってどのような影響を受けるかということが主要な関心となる。

〈伝統的男性性〉 伝統的男性性指標を従属変数として 4 要因分散分析を行なった。そのさい解釈可能性の観点から、4 要因交互作用効果は誤差項に組み入れた。

まずはアプリアリに検証すべき事項として、「被験者の性別」×「性別構成」の 2 要因交互作用効果について検討する。この交互作用効果は、統計的には有意な効果ではなかった。ただし社会的アイデンティティ仮説はこの交互作用効果が有意とはならないことを予測しており、各条件ごとに平均値について検討する必要がある。

結果（Fig. 1）は、男性被験者・女性被験者ともに、数的構成の点でマイノリティ状況におかれた場合には、自己の伝統的男性性（ここではリーダーシップ性）を低く自己評定する一方で、マジョリティ状況におかれた場合には自己の伝統的男性性を高く評定していた。

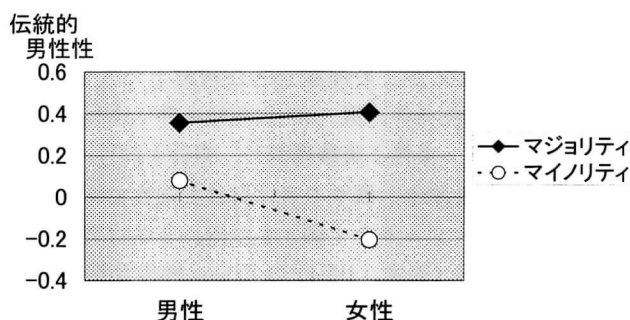


Fig. 1 伝統的男性性自己評定に及ぼす「被験者の性別」と「性別構成」の効果

4 要因分散分析の結果、有意な効果が示された処理効果について以下に示そう。「性別構成」要因の主効果が有意となり ($p < .01$)、マジョリティ条件の被験者の方が自己の伝統的男性性を高く評定した。また「公的表明性」要因の主効果が有意となり ($p < .05$)、ビデオ録画条件の被験者の方が自己の伝統的男性性を高く評定していた（なお「性役割態度」要因の主効果は危険率が $p = .102$ となり、参考までに平均値の大小を比べてみると、平等主義的性役割態度高群の方が、自己に対する伝統的男性性を高く評定した）。さらに「性別構成」×「性役割態度」の2要因交互作用効果が有意な傾向差を示した ($p < .10$: Fig. 2)。NK法による下位検定の結果、マイノリティ条件においては性役割態度条件間に差異が見られない一方で、マジョリティ条件においては、平等主義的性役割態度高群の方が、自己の伝統的男性性を高く評定していた。すなわちマジョリティ条件で示されている高い男性性は、主として平等主義的性役割態度高群の被験者によって示されたものであることがわかる。

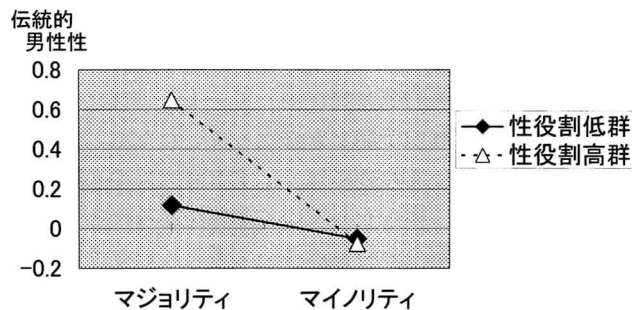


Fig. 2 伝統的男性性自己評定に及ぼす「性別構成」と「性役割態度」の効果

〈伝統的女性性〉 伝統的女性性指標を従属変数として、同様の4要因分散分析をおこなった。まず「被験者の性別」×「性別構成」の2要因交互作用効果について検討する。この交互作用効果は、統計的には有意な効果ではなかった。ただし男性性指標の場合と同様、仮説検証のために各条件ごとの平均値について検討した結果、男性被験者・女性被験者ともに、性別構成の点でマイノリティ状況におかれた場合には、自己の伝統的女性性（ここではフォローシップ性）を高く自己評定する一方で、マジョリティ状況におかれた場合には自己の伝統的女性性を低く評定していた (Fig. 3)。この結果パターンは、伝統的男性性と伝統的女性性が対称的なものであると考える範囲内において、男性性指標についての結果と内容的

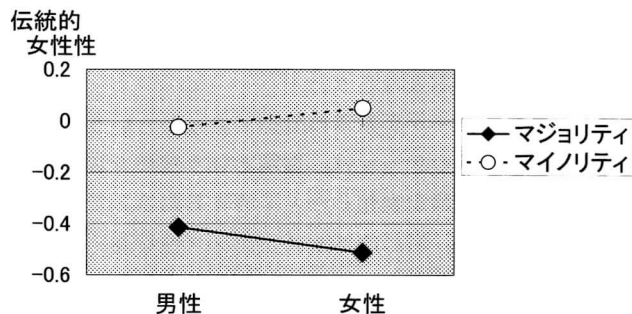


Fig. 3 伝統的女性性自己評定に及ぼす「被験者の性別」と「性別構成」の効果

に一貫性を有したものであると言える。

次に、4 要因分散分析の結果、有意な効果が示された処理効果について示す。まず「性別構成」要因の主効果が有意であり ($p < .05$)、マイノリティ条件の被験者の方が、自己の伝統的女性性を高く評定していた。また「性役割態度」要因の主効果が有意となり ($p < .01$)、平等主義的性役割態度高群の方が、自己に対する伝統的女性性評定は低かった。

[考 察]

本研究結果は、男性被験者・女性被験者ともに、性別構成の点でマジョリティ状況におかれた場合に比してマイノリティ状況におかれた場合に、自己の伝統的男性性（リーダーシップ性）を低く評価し、また、自己の伝統的女性性（フォロワーシップ性）を高く評価するという結果が得られた。すなわち3つの対立仮説の内のいずれも支持を得ず、3つの仮説と対応づけるならば、「社会的アイデンティティ仮説」が予測する結果とは逆方向の結果が得られたと言える。先行研究とは異なるこのような結果は、性別を意識することが引き起こす性的ステレオタイプ化効果様態の文脈的依存性を示しているとは言えるだろう。しかし、その結果パターンが3つの仮説のいずれの予測とも異なっていたため、先行研究と本研究の知見を統合的に解釈しそれを実証していくためには、まず本研究での実験設定上の特質を再考した上で、新たな変数を考慮に入れて検証をしていく必要があるだろう。

まず本研究で取り上げた実験設定上の特質について考えていこう。本研究では、ジェンダーの問題に対する気づきや意識を高めるという目的にかんがみて、「夫婦間での家事分担」をディスカッション・テーマとして選択した。このテーマは、概して、女性の主張・立場の方が社会的に望ましくまた合理的、すなわち有利な側であると考えられがちなテーマであると言える。したがって、社会的アイデンティティ仮説が一般に想定している、「男性グループが上位グループ」であるとする仮定は、事態を取り巻く状況やそこで交わされている話題などによって状況依存的に変容しうるものである可能性を考慮しなければならないと考えられよう。つまり本研究でのディスカッション・テーマ（「夫婦間での家事分担」）においては、女性グループの方が上位グループとして認識されていた可能性が十分にある。もしそうであるならば本研究結果は、伝統的男性性指標・伝統的女性性指標ともに、3つの対立仮説の中で「社会的アイデンティティ仮説」をともに支持する結果であったことになる。この点についてさらに積極的に検討していくためには、男性グループの方が上位グループであると認識されるようなディスカッション・テーマを取り上げた実験を別途実施し、結果を比較する必要がある。また、グループ間の勢力関係・優劣意識についての被験者による知覚を尋ねる質問項目を組み入れておくことも有用となろう。

さらに、ディスカッション・テーマが家事の分担であったということは、別の要素を生み出していたことも推量される。このテーマは、性別という基準を意識させるのみならず、男女間に対立的もしくは威圧的な要素を喚起したとも考えられる。その結果、男女ともにマジョリティ条件においては相対的に、自己のリーダーシップ性を高く評価し、逆に自己のフォロワーシップ性を低く評価していたことに結びついたのかもしれない。

このように被験者グループ内での人数上の性別構成を操作することで性別顕現性を実験的

に取り扱おうとすると、そのさいには、男女間の対立的構造が不可避免的に共生起すると言えよう。したがって、人数上の性別構成を操作するという方法は、勢力関係としての多数派—少数派意識ならびに勢力関係としての優劣意識から生じる影響を含み持ったものとなっていることを考慮しておく必要がある。逆に、対立的構造要素を払拭するために、男女グループ間に協同状況を導入するという方法も考えられよう。このように、性的顕現性という概念は、社会的影響過程、競争／協同状況といった広範な社会心理学領域の文脈の中で再考されるべき価値を有していると言えるだろう。

また、男性性次元での結果と女性性次元での結果を比較してみると、男性性次元の方が、独立変数による有意な効果が多く、かつ、予測枠組みと合致する傾向が強かった。なぜこのような結果となったのであろうか。同じ評定項目と類似した実験設定を用いた先行研究である潮村（1995）でも、女性性次元における独立変数の効果は、男性性次元に比べて相対的に少なかった。その理由としては、刺激として用いた設定場面（ディスカッション場面）が、伝統的男性性（リーダーシップ性）との関わりが深い場面設定であったことが考えられる。その結果、女性性次元を意識することは少なく、同次元上での評価は困難な側面が強くなる。したがって、女性性次元での自己ステレオタイプ化評定は、実験状況下での自己ステレオタイプ化（すなわち文脈依存的な自己ステレオタイプ化）を反映しにくくなっていることが考えられる。

Swan & Wyer (1997) では、3つの仮説について論じていく中で、情報処理論の枠組みや情報処理過程を明示しているわけではなく、伝統的性ステレオタイプの回避・抑制に関して動機づけ論の視点から論じられている。本研究でも、2つのカテゴリー化効果過程（accentuation 効果とステレオタイプの評定）の乖離様態について、状況要因と個人差要因の影響という点から解明しようとしてきた。しかし、既存のステレオタイプを抑制し回避するためには、その社会的な動機づけ要素のみならず、それを支える情報処理機構のはたらきが検討されなければならない。すなわち、ステレオタイプ回避仮説における男女被験者、および社会的アイデンティティ仮説における女性被験者の反応に関しては、既存の伝統的ステレオタイプを能動的に抑制し、かつそれに反する性ステレオタイプを付与するという過程についてより直接的な測度を用いた検討が必要であろう。

なお、今回の実験設定では、公的表明性要因として設定された2つの条件、つまり「ビデオ録画後、そのビデオを授業中に公開」もしくは「単に記録としてビデオ録画」という2つの条件設定はともに、公的—私的表明性という次元上では、相対的に公的な領域に属すると言えるだろう（私的表明場面として典型的に想定される場面としては、例えば、まわりに他者が存在しておらず、かつ回答者の匿名性が保証されているような場面が考えられる）。日常場面では、自己の態度や意見を公的に表明することはむしろ特殊な状況であるとも言える。今後は、私的な状況下での反応も検討していくことが有用である。

ところで自己に対する評定を分析対象とし、自己に対する伝統的男性性・伝統的女性性を測定しているにもかかわらず、両指標ともに「被験者の性別」要因の主効果が有意ではなかった。この結果は予想外と言えよう。この結果が示唆することには、今回のような実験課題と測定指標を用いた場合には、自己評定を行う場合に、男女それぞれが判断基準として同性者グループを比較判断の基準として用いている可能性が推測される。

また、本研究で取り上げた独立変数（特に状況依存性について検討することを目的として取り上げた変数）が、自己評定に対して明確な影響を有するためには、本実験のようにディスカッションを視聴するという消極的な関与形態ではなく、所与の状況に対するより積極的な関与形態（例えば、被験者自らがディスカッションに参加する、など）が必要であるということも考えられる。そしてそのような積極的な関与形態下でのステレオタイプ化様態は、関与形態の影響を受けたものとなるであろう。個人を取り巻く当該状況に対する積極性／消極性というテーマは、現実場面での性ステレオタイプ・性役割の問題とも密接な関連性を有していると言えよう。

[引用文献]

- Allport, G. W. 1954 *The nature of Prejudice*. Cambridge, Mass.: Addison-Wesley. (原谷達夫・野村昭 訳 1961 『偏見の心理』 培風館)
- 東 清和・小倉 千加子 1984 『性役割の心理』 大日本図書
- Dreyer, N. A., Woods, N. F., & James, S. A. 1981 ISRO: A scale to measure sex-role orientation. *Sex Roles*, 7, 173-182.
- Frable, D. E. S., & Bem, S. L. 1985 If you are gender schematic, all members of the opposite sex look alike. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 459-468.
- Hensly, V., & Duval, S. 1976 Some perceptual determinants of perceived similarity, liking, and correctness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 159-168.
- Hewstone, M., Hantzi, A., & Johnston, L. 1991 Social categorization and person memory: The pervasiveness of race as an organizing principle. *European Journal of Social Psychology*, 21, 519-528.
- McGuire, W. J. 1984 Search for the self: Going beyond self-esteem and the reactive self. In R. A. Zucker, J. Aronoff, & A. I. Rabin (Eds.), *Personality and the prediction of behavior* (pp. 73-120). NEW YORK: Academic Press.
- 潮村公弘 1995 ステレオタイプの認知とカテゴリー化情報の関係について 一人記憶、印象評定に及ぼす刺激手掛かりの効果— 実験社会心理学研究, 35, 1-13.
- 潮村公弘 1991 ステレオタイプ形成の認知的基礎 —Categorizationの観点から— 平成2年度 東北大学文学研究科修士論文 (未公開)
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- Park, B., & Rothbart, M. 1982 Perception of out-group homogeneity and levels of social categorization: Memory of the subordinate attributes of in-group and out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 1051-1068.
- Swan, S. & Wyer, R. S. 1997 Gender stereotypes and social identity: How being in the minority affects judgments of self and others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1265-1276.
- Taylor, S. E., & Falcon, H. T. 1982 Cognitive bases of stereotyping: The relationship between categorization and prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 426-432.
- Taylor, S. E., Fiske, S. T., Etcoff, N. L., & Ruderman, A. J. 1978 Categorical and contextual bases of person memory and stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 778-793.

**Effects of numerical composition of mixed-sex group
on self-stereotyping of gender :
An investigation of self-categorization,
stereotype-avoidance,
and social-identity hypothesis.**

KIMIHIRO SHIOMURA

Department of Social Psychology,
Faculty of Arts, Shinshu University

ABSTRACT

How being in the minority or majority of mixed-sex group affects stereotyped judgments of self. University students (thirty-eight males and 38 females) participated in the experiment in groups that they are either the only member of their sex or in majority. Participants listened to the recorded tape of a discussion of four speakers (2 males and 2 females) and also were shown slides of the speakers. In this way, the subjects were exposed to both the voices and faces of the speakers. Then participants rated themselves along gender-stereotypic traits. We compared three hypotheses on stereotyping: self-categorization hypothesis, stereotype-avoidance hypothesis, and social-identity hypothesis. Results of self-stereotyping showed the effects contrary to the social-identity hypothesis. We discuss our findings in terms of the theme for discussion, and also of situational and personal factors.

Keywords : gender salience, gender stereotype, majority, minority, sex role.